

音楽の散歩道 その9の2

— バレエ, バレエ・リュスとポリーニ —

| キラメキテラスヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 | 大海クリニック・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

はじめに

ポリーニの日本デビューは、ストラヴィンスキーとプロコフィエフの曲であった。この2人のロシアの作曲家から連想されるのは、ディアギレフのバレエ・リュスである（本誌・前回5月号の図1）。

バレエは、音楽、美術（舞台装飾、衣装）、舞踏及びその振付、文学（台本）等を含む総合芸術である。

今から約百年前の1922年、関東大震災の

前年、芥川は「僕は兎に角美しいものを見た」と述べた。

その豪華さ、美しさに於て、バレエは観劇の中でも、最も楽しいものの一つであろう。世界から紛争・戦争が一日も早く無くなり、バレエが楽しめる世の中が復活して欲しいものである（図14）。

本稿では、前回に引き続き、〔2〕バレエの簡単な歴史〔3〕アンナ・パヴロワ〔4〕ディアギレフのバレエ・リュスについて述べる。（図は、前回からの通し番号とする）



図14 グランドバレエの鹿児島公演
 左:眠れる森の美女(2002) 中:くるみ割り人形(1992) 右:白鳥の湖(1993)

〔2〕バレエの簡単な歴史

文化先進国イタリア発祥のバレエは、フィレンツェのカトリーヌ・ド・メディチにより、料理・作法などと共に、後進国のフランスに伝えられた。

1533年、彼女がオルレアン公、アンリ・ド・ヴァロア（後の仏国王・アンリ2世）と結婚

した事によって。

当時は、長時間かけて演じられる大規模な「宮廷バレエ」であった。

それから120年後の1653年、バレエの名手、14歳のルイ14世（1638-1715）は宮廷バレエの名作「夜のバレエ」で「太陽（太陽神アポロン）」役を踊った（図15）。

それ故、その後、彼は「太陽王」「踊る王」と称せられた。

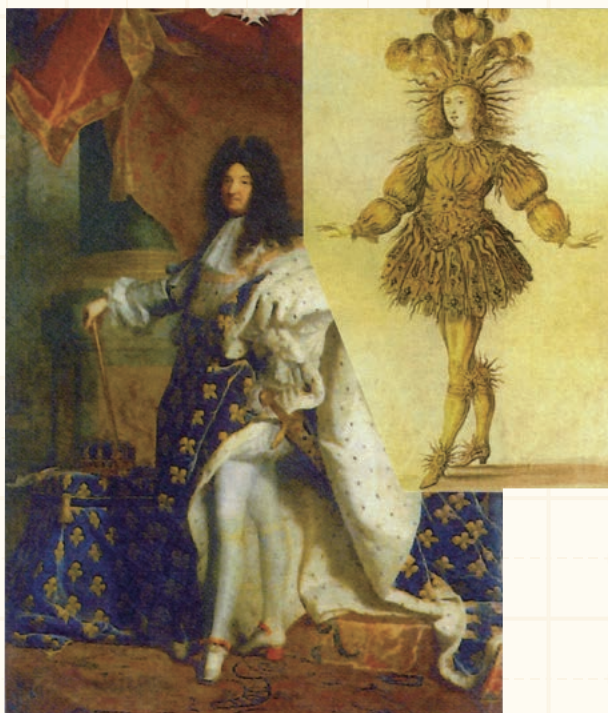


図15 「太陽王」ルイ14世と太陽神アポロン

4歳で即位した彼は、絶対王政最盛期のブルボン朝の国王で、王権神授説に基づき、「L'Etat, c'est moi, 朕は国家なり」と言ったように、絶対君主であった。

彼の時代にバレエも最初の黄金期を迎えた。

ルイのバレエの師、ピエール・ボーシャンは、現代でもバレエに必須で、最も基本となる第1～5の「5つの足のポジション」を定めると共に、「トゥール・アン・ルール」(垂直跳躍回転)を行ったと言われる。

図15を見てみよう。ルイ14世のこの肖像画に関しては、従来、下肢を露出し、ハイヒールで身長を高く見せるという事のみが、強調されている。

然し、この肖像画の彼の足のポジションをよく見ると、彼は無理なく安定した姿勢になるように、浅い第2ポジション(両足は真横に一直線ではなく、「逆八の字形」)で立ち、且つ、左足の角度はそのまま保持し、一步前方(アヴァン)に平行移動させ(踏み出し)、更に両膝を軽く緩めている。棒立ちにならない事が重要である。

この形は、肖像画の国王に安定感、余裕、

威厳を持たせる事に成功している。

更に斜に構える事になり(剣術やフェンシングの基本形に近い)、隙無く、身体のリーンもスッキリさせ、動きも感じさせる。

幼い頃から学び、身に付けたバレエに基づいた彼の美的センスの良さが窺われる。

次に図15右上の、ルイが14歳の時の「太陽」役の肖像画を注意深く観よう。

(誰も現在まで、300年以上言及していないが)驚くべきは、足のポジション、手足の位置と方向、下肢の露出度、ハイヒールなどは、後の肖像画と寸分違わぬ(胸の太陽の縫い取りは、ベルサーチでも御馴染み)。

1661年には、王立舞踏アカデミー、71年には、パリ・オペラ座が創設された。

1700年には、ラウル・ファイエが振付のファイエ式舞踊記譜法(ノーテーション)を考案。記譜法により、振付が後世に伝わる。



図16 バレエ「愛の勝利」を踊る10歳のマリー・アントワネット

図16は、後にルイ16世の妃となる、ハプスブルグ家の10歳のマリー・アントワネット(1755-93)が、兄・ヨーゼフ2世の婚礼の宴で、バレエ「愛の勝利」を踊った時の情景である。マリーは音楽好きでハープの演奏

などにも長け、田園生活を好んだ。

仏革命勃発後（1789）、宮廷バレエは終焉を迎えた。

18世紀末～19世紀初頭に芸術の世界、即ち、文学、音楽、絵画の分野にロマン派の時代が到来した。仏にロマン派バレエも起った。

1831年にパリ・オペラ座公演で大ヒットしたマイアベーアのオペラ「悪魔（鬼）のロベール」の中の「尼僧のバレエ」で、長めの白いロマンティック・チュチュを着た尼僧達のバレエで、「バレエ・ブラン」の時代が幕をあけた（図17）。

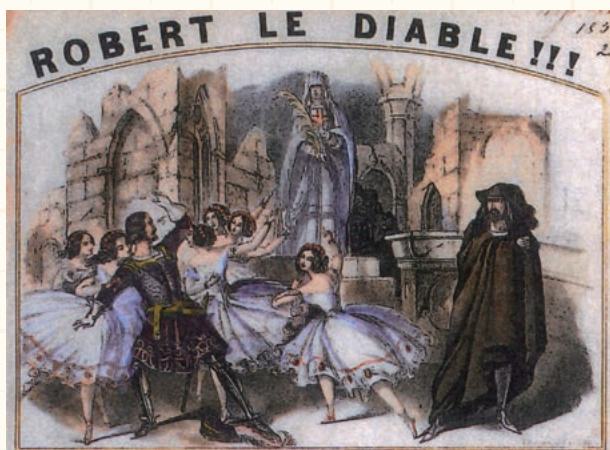


図17 オペラ「悪魔のロベール」,「バレエ・ブラン」の幕開け

32年には、ロマンティック・チュチュをまとい、トウシューズを履いたマリー・タリオーニが父の振付で名作「ラ・シルフィード」を初演。トウの技術が確立した。

41年には、カルロッタ・グリジらにより、名作「ジゼル」が初演された（図18）。

図のように、ジゼルでの森の墓場（ジゼルの十字架の墓）、吊りにより、舞台上で実際に宙を飛ぶ、軽く薄いチュチュをまとった妖精など、情景は正にロマン派そのものであった。宙を飛ぶ事は、既にこの頃から行われており、舞台装置も大掛かりであった。

1830-40年代に、バレエは、このロマン派バレエで第2の黄金期を迎え、前記の他、「オンデーヌ」「エスメラルダ」「パ・ド・カトル」「パキータ」など女性バレリーナの時代であった。

45年の「パ・ド・カトル」は、タリオーニ、グリジなど女性の名バレリーナの共演であるが、記譜は残されていない（図19）。



図18 ロマン派バレエ「ジゼル」情景は、典型的ロマン派



図19 「パ・ド・カトル」を踊る名バレリーナ達

「西欧文化の窓」、帝政ロシアの「サンクトペテルブルグ」に仏人のダンサー、振付師のマリウス・プティパ（1818-1910）が訪れたのは、1847年であり、60年に、この地にマリンスキー劇場が完成した。

プティパは、「ジゼル」改訂(84)、「眠れる森の美女」初演(90)、更に助手のイワノフと共に「くるみ割り人形」初演(92)、「白鳥の湖」改訂版上演(95)など、グランドバレエを完成、確立させた。

バレエの中心は、仏から露に移った。第3の黄金期と言えるだろう。

チュチュは短いクラシック・チュチュになり、トウやフェッテの技術は格段に進歩した。

なおグランドバレエの確立には、チャイコフスキーに作曲を依頼した、劇場監督のフセヴォロジスキーの手腕も見逃せない。

総合芸術であるバレエは、振付、美術、音楽、ダンサーなど全てを統括する人材が必須なのである。

更に、革命や大戦で経済的なパトロン、即ち王室の庇護を失ったバレエ団を率いるに

は、あらゆる面で才能を持った興行主が必須となる事は、言うまでもない。

バレエ史上、際立った才能を持って、バレエ界に革命を起こした人物が、バレエ・リュスを率いた、セルゲイ・ディアギレフである。アンナ・パヴロワも初期に一時期、このバレエ団に参加した。

〔3〕 アンナ・パヴロワ

サンクトペテルブルグ生まれのアンナ・パヴロワ(1881-1931)は、9歳の時に「眠れる森の美女」の初演を観て、バレリーナを志すと、10歳で帝室舞踏学校に入学、18歳で卒業。優秀だったのだろう、コール・ド・バレエを飛び越え、コリフェでマリインスキー劇場に入団している(図20)。



図20 「僕は兎に角美しいものを見た」『瀕死の白鳥』

その後、第2、第1ソリストを経て、24歳でバレリーナに昇格。バレリーナになるまで14年を費やしたが、何と翌年、1906年に25歳でプリマ・バレリーナに昇進、厳しい世界の頂点に立った。

バレリーナに昇格したアンナは、公園の白鳥とテニスの詩からインスピレーションを

得、ダンサー兼振付師のミハエル・フォーキン(1880-1942)に振付を依頼。そして「白鳥(後の瀕死の白鳥)」が誕生した(07年にサンクトペテルブルグで初演)。

09年には、ディアギレフのバレエ・リュスのパリ公演に参加。

ショパンの曲をストラヴィンスキーらの編

曲、フォーキン振付で、パヴロワとニジンスキーの2枚看板で「レ・シルフィード」を踊った（これは、前記、1832年の「ラ・シルフィード」とは無関係であるので注意）。

ところが、10年には、ストラヴィンスキーの「火の鳥」の野蛮な音楽(?)が嫌で、バレエ・リュスを離れた。

アンナは、バレエに関しては保守的で、優美な音楽と振付を愛したし、性格的に男性好きのディアギレフの元では、真の主演にはなれない事を悟ったのである。彼女は常に自分が絶対的主演であらねばならなかった。

1911年には、バレエ団、パヴロワ・カンパニーを結成。その後、「バレエ普及の伝導者(宗博)」として、アンナは死ぬまで世界巡演の旅を続けた。

船旅の時代に43ヶ国に及ぶ巡礼の旅であった。公演回数は3,600回、総観客数200万人。アンナは肺炎、肋膜炎で、ハーグで49歳の生涯を閉じた。

図21は40年前、市内の有楽座で観た、アンナの生涯を描いた映画のパンフレットである。よく残っていたと感心している。

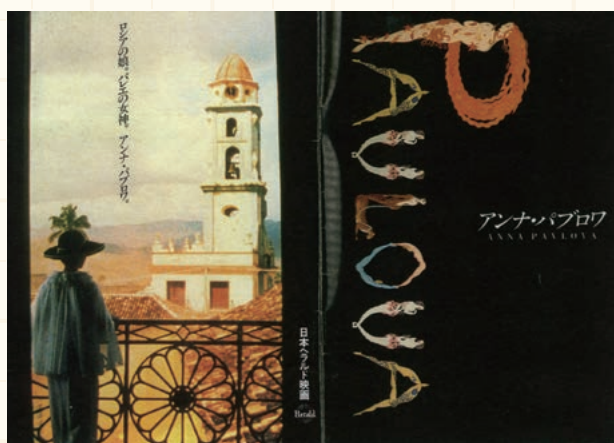


図21 「有楽座」で観た映画のパンフ(40年前)

1922(大正11)年(関東大震災の前年)、42歳のアンナは、日本公演を行う。20日間の帝国劇場公演の他、5都市を巡演した。観客が多かったのだろう。以下、感想。

・芥川龍之介

「瀕死の白鳥」は美しい。……

僕は兎に角美しいものを見た。

・後年の淀川長治(当時13歳)

「とんぼ」に酔い「白鳥」に泣いた。

淀川は、彼女の「手」の動き、「凄い衣装」に感激している。

更に「その胸のところに小さい赤いルビーがキラと光るのが目にしみて、この白鳥のこれが命取りの傷……その矢をむしりとったあとかとも思え……」と詳細な感想を述べている。

・当時、中学生の蘆原英了

午後8時開演の2円席を、昼から並び、68番の切符を得た事、「瀕死の白鳥」で、もう死んだと思った時に、ピクッと動いた印象など述べている。



図22 バレエ「とんぼ」(美しきロスマリン)

当時のアンナを観た人は皆、彼女の踊りや舞台、衣装にまで、衝撃を受けた事が知られる。彼女は確かに、バレエの伝導者であった。

ちなみに「とんぼ」は、10歳でウィーン、12歳でパリ音楽院を共に首席で卒業したクライスラー(本誌5月号のロザリン・チュー

レックの所でも紹介)作曲の「美しきロスマリン」,「瀕死の白鳥」は,サン・サーンスの「動物の謝肉祭」より「白鳥」である(図22)。

音楽家にもアンナのファンが多い。R.ボニング(夫人はJ.サザーランド)は,アンナの踊った曲を,1980年に2枚のLP「パヴロワを讃えて」に収めている(図23)。



図23 LP「パヴロワを讃えて」(1980)

パヴロワの後,多くのバレリーナが「白鳥」を踊っているが,「ボリショイの花」マイヤ・プリセツカヤのものが優れている。

彼女の技術,跳躍力,柔軟性は,比類の無いものであった(夫は,ソ連を代表する作曲家・シCHEDリンで,彼はソ連人唯一のALSメンバーであった)。



図24 周囲のダンサーも見とれるマイヤの跳躍

図24は,ドン・キホーテでキトリを踊るマイヤ。左手指は,左足先に触れるほどで,背屈した後頭部は,左大腿に触れんばかりである。マイヤは35歳でプリマに昇格した。

〔4〕セルゲイ・ディアギレフとバレエ・リュスの時代

ディアギレフ(1872-1929)は,ペテルブルグ大学法科時代にリムスキー・コルサコフに作曲等を学んだ(図25)。

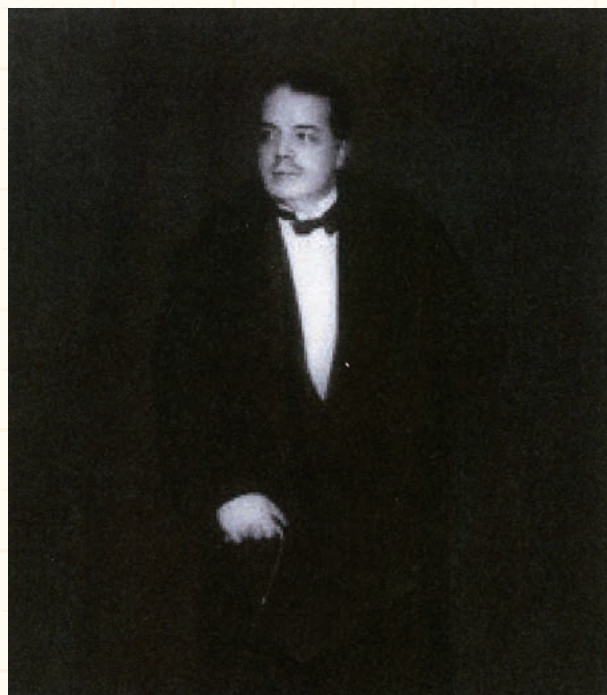


図25 セルゲイ・ディアギレフ

1898年には,ブノワらと「芸術世界」を創刊し,西欧美術をロシアに紹介。

1907年には,ラフマニノフ,スクリアピンの演奏会をパリ・オペラ座で主催。

09年には,帝室マリンスキー劇場の夏期休暇を利用した,パリ・シャトレ座での「セゾン・リュス」の(引越)公演で大成功を収めた。ダンサーは,パヴロワ,ニジンスキー,タマーラ・カルサヴィナら,演目は,「レ・シルフィード」「クレオパトラ」などであった。

これが「バレエ・リュス,ロシア・バレエ団」の実質旗揚げ公演となった。

ここから,彼の死の1929年までの20年間

が、「バレエ・リュス」の時代であった。

バレエ・リュスは、総合芸術としてのバレエで、パリを中心としたヨーロッパ、アメリカで衝撃を与え続け、男性を中心としたバレエの黄金期を創造した。

中心となったダンサー、振付師は、ミハイル・フォーキンとワツラフ・ニジンスキーであり、特に后者のディアギレフとの関係は密であった。



図26 映画「ニジンスキー」:ニジンスキー,ディアギレフ,ロモラのトライアングル(1980)

図26は、ニジンスキー、ディアギレフ、ロモラのトライアングルを描いた映画の音楽のLP(多分日本発売は無く、個人輸入)。

10年には「シェエラザード」(音楽リムス

キー・コルサコフ、振付フォーキン、舞踏ルビンシュテイン(ニジンスキー)、「火の鳥」(音楽ストラヴィンスキー、振付フォーキン、舞踏フォーキン)なども演じられた。

バレエ・リュスが、1909-1929年の21年間に公演した演目は、72である。単純計算すると、1年に新作3.5演目を創作・公演した事になる。

実際1912年を例にとると、パリ・シャトトレ座で、5月13日「青色の神」、5月20日「タマラ」、5月29日「牧神の午後」、6月8日「ダフニスとクロエ」と1ヶ月の間に新作4演目の初演が行われている。超人的と言わねばなるまい(図27)。



図27 「牧神の午後」のニジンスキー

さて、ディアギレフに見出され、採用された才能溢れる若き芸術家達を列挙しよう。作曲家や画家などには、きっと皆様が周知の人物も多々いると思われる。



図28 左:「シェエラザード」 右:「バラの精」ニジンスキーとタマラ・カルサヴィナ

(1) ダンサー兼振付師

ミハイル・フォーキン、ワツラフ・ニジンスキー (図28)、ブラン斯拉ヴァ・ニジンスカ (ニジンスキーの妹)、ジョージ・バランシン

(2) ダンサー (バレリーナ)

アンナ・パヴロワ、タマーラ・カルサヴィナ (図28) 他多数。

(3) 作曲・編曲家 (主な演目)

ストラヴィンスキー (火の鳥、ペトルーシュカ、春の祭典)、プロコフィエフ (道化師、鋼鉄の歩み)、リヤードフ (ロシア物語)、リムスキー・コルサコフ (シェエラザード、金鶏)、リヒャルト・シュトラウス (ティル・オイレンシュピーゲル)、ドビュッシー (牧神の午後、遊戯)、ラヴェル (ダフニスとクロエ)、サティ (パレード)、ミヨー (青列車)、ファリャ (三角帽子) ……。

(4) 指揮者

ガブリエル・ピエルネ、ピエール・モントゥー、エルネスト・アンセルメ ……。

(5) 舞台美術 (画家、舞台装飾、衣装)

図29 「牝鹿」マリー・ローランサン幕画

ゴロヴィン、ゴンチャロワ、バクスト、ブノワ、ピカソ (パレード、三角帽子、プルチネッタ)、マティス (ナイチンゲールの歌)、ルオー

(放蕩息子)、ボーシャン (ミューズを導くアポロ)、ローランサン (牝鹿) (図29)、ドラ (風変わりな店)、ブラック (ゼフィールとフロール)、ブルーナ (パストラル)、デ・キリコ (舞踏会)、ユトリロ (バラボー)、ミロ (ロミオとジュリエット)、シャネル (青列車) ……。

以上、今日でも比較的名の知られた人物を挙げた。お互い反目する事もあったが、全員が芸術に生きた仲間達であり、「ベル・エポック」「エコール・ド・パリ」の一翼を担っていた。

ここでは、バレエ・リュスのトップスターであったニジンスキーについて記す。

ニジンスキー (1890-1950) は、現在のウクライナのキーウに生まれ、9歳で帝室舞踏学校に入学。1907年に卒業したが、非凡な才能の彼は、コリフェでマリインスキー劇場に入団した。

1909年に、アンナ・パヴロワ、ミハイル・フォーキンらと共にディアギレフのバレエ・リュスに参加した (図30)。

ダンサーとしては「アルミードの館」「レ・シルフィード」「シェエラザード」「ジゼル」「白鳥の湖」「牧神の午後」「ダフニスとクロエ」「バラの精」「ペトルーシュカ」などを踊った (図31, 32)。

振付師としては「牧神の午後」「遊戯」「春の祭典」「ティル・オイレンシュピーゲル (1916)」を振り付けた。

1913年、貴族の令嬢で団員となったロモラ・デ・プルスキと結婚したため、ディアギレフの反感を買い退団。その後、ほとんど表舞台に立つ事は無かった。そして伝説のバレエ・ダンサーとなった (図26)。

ピカソは、団員のオルガ・ホフロワと結婚し、修正資本主義の経済学者J.M. ケインズも団員のリディア・ロポコワと結婚した。



図30 ニジンスキー 左:「バラの精」 中:「レ・オリエンタル」 右:宙を飛ぶように跳躍するニジンスキー「アルミードの館」



図31 「ペトルーシュカの部屋」ブノワによる舞台画



図32 「ペトルーシュカ」
左:ニジンスキー
右:左よりニジンスカ,コベレフ,ショラール

ディアギレフ自身は、女性を愛する事は無かったが、上流階級の女性達に支えられた。それは、彼の産み出す芸術作品の素晴らしさと、それに対する彼のひたむきな態度、行動力に魅せられたからに他ならない。

英国のリボン侯爵夫人とその娘ジュリエット、パリ社交界の女王ミシア・セール、エドモンド公妃（ミシンの発明者シンガーの娘）などである。

彼女達は、多くの芸術家達をディアギレフに紹介したり、公演を援助し、彼を後援した。ミシア・セールの親友ココ・シャネルも、そ

の一人である。

ココは「春の祭典」の公演に30万フラン援助した。

1929年、糖尿病が悪化したディアギレフは、ヴェニスで客死した。たまたまココの恋人、ウエストミンスター公爵のヨットで、地中海クルーズ中のココ・シャネルとミシア・セールの2人は、ディアギレフの最後を看取る事ができた。彼の葬儀費用は、ココが負担したと言われる。

多くのロシア人と知り合う内に、ココは露人調香師エルネスト・ボーを紹介され、「シャ



図33 ストラヴィンスキーの3大バレエを指揮したアンセルメのLP(サイン有)とシャネルに結婚を申し込み拒否されたストラヴィンスキー

ネル No.5」が生まれた(1921)。

文庫本「シャネル, 人生を語る」には, 簡単ではあるが, バレエ・リュス時代のディアギレフ, ストラヴィンスキー, アンセルメ他音楽家, 作曲家の事などが, 生き生きと記されている(図33)。

彼の死と共に「バレエ・リュス」は解散したが, ジョージ・バランシンなど, 残された団員は, 自分の道を歩んだ。

当地, 鹿児島には多くのバレエ団があり, 多くの先生方が, 研鑽, 指導に日々励まれている。バレエはプロになるには厳しい世界であるが, 小さいバレリーナにとっては夢の世界であり, 身体能力, 美意識, 規律, 忍耐力, マナーを養うには最適である。鹿児島のバレエ界全体の発展を祈念する。

創作バレエ, グランドバレエはもとより, 近年, 「ペトルーシュカ」や「シェエラザード」などにも, 積極的に取り組んでいる, 「白鳥バレエ」団長, プリマ・バレリーナの白鳥五十鈴氏の2枚の写真(共演, Kバレエ東京, 西野隼人氏, 図34)を提示し本稿を終える。

(つづく)



図34 左:「瀕死の白鳥」 右:「シェエラザード」